
魔法少女リリカルなのは -願種-

三点リーダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは - 願種 -

【Nコード】

N6337X

【作者名】

三点リーダ

【あらすじ】

云わば、最低系のテンプレ的展開である転生。

青年は死して、転生し、戦いと原作に憧れてそれを受け入れた。

だが転生の特典は無かった。リンカーコアも無かった。

これは、そんな青年が転生しても頑張って戦う道を探し、手に入れ、前に進んでいく。そんな話にしたい。

ご都合主義と見切り発車が多量に含まれております、苦手な方は注意して下さい。

主人公設定・オリキャラ設定（前書き）

サブタイどおりですが、随時更新したいと思います。

主人公設定・オリキャラ設定

七村志岐

年齢・16歳

誕生日・4月10日

魔導士ランク・-

詳細

転生者にして本編の主人公。

残念ながらリンカーコアも無く、死んだのもミスでは無いので特典も無し。

前世では表面では少々前向きな考えを持つ高校生だったが、実は隠れオタク。

漫画やゲームが好きで、自分もこんな力を持って戦いたいと思っていた節がある。

転生後はなのはや皆の兄貴分として日々を過ごしていた。

しかしジュエルシードを手に入れて戦う事が可能となり、その戦闘技術を磨いていく。

ジュエルシードシリアル？ 能力・強化

肉体を主に強化し、その威力は巨大に変化したジュエルシード暴走体を吹き飛ばす程。

ジュエルシードシリアル？ 能力・風

風や気流、気圧の制御や強化が可能。空を飛んだり真空の刃を生み出す事も。

ジュエルシードシリアル？ 能力・金属

魔力を使い金属を生成する。剣や槍、構造を知っていれば銃等も生み出せる。錬金術に近い力。

ジュエルシードシリアル??? 能力・空間

空間を移動する瞬間移動や結界を破る力、そして次元世界を移動する亜空間の移動も可能。

その他に、強度もそこそこに、空間を固定する事もできる。

エリシア・テストロッサ

年齢・不明（推定9歳）

誕生日・不明

魔導士ランク・不明

詳細

現在、彼女に関する情報はほぼ不明である。

分かっているのはフェイトと瓜二つの姿をしているという事。

浅木美希

年齢・15歳

誕生日・12月27日

魔導士ランク・-

詳細

志岐の同級生で中学時代からの友人。

男言葉で話し、姐御肌な為か志岐と付き合っているという噂が絶えない。

本人はそれをあまり気にしていない。

将来はジャーナリスト志望。

転生者にしようか唯のオリキャラにしようか作者も持て余し気味。

第0話 死刑宣告、んで転生（前書き）

衝動的に書いてみたくなった、云わば見切り発車です。

多分見る人の殆どが、「ああ、何時もの最低系か」と思う内容ですが見放さないで頂けると嬉しいです。

しかし作者はガラスのハートなので中傷、罵詈雑言コメントはせず、読む価値ねえと思った方は右上の閉じるを押して下さい。

間違いや誤字脱字は甘んじて受け入れるのでお願いします。

因みに作者は中傷やら罵詈雑言やらは苦手なガラスのハートなので、そういった場合はコメントはしないで読む価値ねえわと右上の閉じるを押して下さい。

第0話 死刑宣告、んで転生

気がつけば、何処とも分らない白い空間に彼は居た。

髪の色・黒、瞳の色、黒、体格、中肉中背。

学業・中の中、運動・中の上、ルックス・中の中。

殆ど何の変哲も無い彼の名は七村志岐。ななむらしき

今年で18歳になるはずの高校生の彼は、確かに歩道を歩いていた筈だった。

「…はあ」

溜息を一つ吐いて胡坐を搔いて座り込んでいる。

時計が無いので正確な時間は分からないが既にこの空間に閉じ込められて2時間以上が経過したかのような感覚に陥っている。

最初こそ警戒し、足を進めたが空間の果ては見えずに疲れてその場に座り込んでしまった。

「こういうパターンは転生系じゃねえのかよ…だとしたら神様何処に居るんだよ…」

彼は所謂隠れオタクだった。

とは言ってもごく軽いもので、アニメを見たり少々アニメ雑誌を買

ったりと。

他ではインターネット小説による二次小説などの転生系も読んで、憧れはあった。

しかし何時まで経っても発展しないこの状況に心細くなっていた。

「ぐあー！くっそー！」

両手で頭をワシヤワシヤと掻き毟り混乱している思考と心細い気持ちを誤魔化そうとする。

「…はあ」

再び溜息一つ吐いてそのまま背中から倒れて大の字になる。

しかし彼の目に飛び込んできたのは白い髭を生やした老人の顔だった。

「どうわ！？」

急な事で驚いてしまい、ガバツと起き上がって振り返る。

その様子を老人は楽しそうに見ていた。

「ほっほっほ！今回の転生者は随分と面白い人間じゃのう」

その言葉にムツとしてしまう志岐だが、今はそれ所ではないという焦りと、さっきの老人の言葉から察した気体が胸に渦巻いていた。

「あ、貴方は…テンプレ的に言っていると神様で？」

「む、最近の転生者は話が早くて助かるのう」

胸の中にあつた焦りは薄れ始め、そして大きくなる期待感。

心の中でガッツポーズをしながらも期待と興奮を抑えながら言葉を続ける。

「と、言うことはさっきの言葉からして俺は死んで、転生するって事でいいんすか？」

今一度、確認するかのように、念を押すかのように聞くと、老人は深く頷いた。

「その通りじゃ。お主が死んだのは別にミスでもわざとでもない…お主はあそこで死ぬ運命じゃった。だが本当に偶然にもワシの目に留まり、転生させると言う事に決定した」

自分が死んだのはそういう運命。

そう聞くと悲しい物もあつた。

前世では母があり、父があり、兄弟があり、友人があり、生活があった。

特に自分を此処まで育ててくれた父親と母親には先立ってしまった事を酷く申し訳なく思う。

しかし、普段から色々な事を前向きに考えるのが得意だった志岐は

気持ちがある程度切り替える。

「それで、俺の転生する先は何処っすか？」

「お主が行く世界は魔法少女リリカルなのはの世界じゃ。完全に平
行世界じゃから好き勝手しても良い」

そのアニメは知っている。

但し無印だけだ。

その続編であるA・sとs t r i k e r sは見たことが無い。

二次創作でちよろちよる見たことはあるが詳しい所はあまり覚えて
いなかった。

「特典とかは無いんすか？」

転生系にはつき物の神様から力を貰うというのを思い出し聞いてみ
る。

作品によってはこれが無しと言うものもある。

「特典は無しじゃ」

それを聞いた瞬間、少し落胆するが向こうで頑張って修行すれば戦
えるし、原作介入も出来るだろうと、特典は諦める事にした。

「それじゃあ早速転生して貰うぞい」

そう言われると同時に、志岐の足元輝きだす。

よくある転移魔法とかそこら辺だろう。

しかし志岐は次の言葉を聞いた瞬間驚愕する。

「因みに言うところがお主にリンカーコアは無いぞ」

「はっ！？」

リンカーコアが無ければ魔法を使う事もできず、憧れであった戦闘もする事が出来ない。

自分も魔法が使えると思っていた志岐は目を丸くして抗議する。

「お、おい！リンカーコアが無いのにどうやって戦えって言うんだ！？贅沢は言わないから特典で…」

「もう遅いわい。しかしお主には嫌でも原作に介入する呪いとフラグの立ち易い呪いをかけておいてやるわい」

「なっ…！」

瞬間、志岐は光に飲み込まれて消えた。

第0話 死刑宣告、んで転生（後書き）

さて、以上がプロローグですが面白くもなんともありませんよね。

本編は次回からです、よろしくお願いします。

第1話 介入不能？介入可能？（前書き）

連投と言っか同時投稿。

フラグ建てたいと思って無理矢理ブチ込みました。

第1話 介入不能？介入可能？

チャリンと硬貨の投入口に100と刻まれたコインを入れ、10と刻まれたコインを二つ続けて投入する。

彼は暫く目の前にあるボタンの上にある見本を吟味すると、意を決してある一つのボタンを押した。

自動販売機からガコンと落ちてきたのは缶ジュース。

葡萄が弾ける様なイラストが描かれ広い年代に人気な国を代表するジュース、名前はファータ。

プシュと口を開けてそのジュースを喉に通すと、バチバチとした炭酸が気持ちよく、甘みもある。

その美味さに一気飲みをして缶の中身を空にした。

思わず軽いゲップをしてしまうのは炭酸だから仕方が無いだろう。

そして彼はその空になった缶を数歩向ここの屑籠に向けて投げると、綺麗な軌道でその中に納まった。

「お、ストライク」

気分良さそうにそう呟いて学生鞆を肩に担いでその場を後にする。

七村志岐は無事に転生して現在12歳の小学6年生として生活していた。

生まれた場所は地球、日本の海鳴市。

海鳴生まれの海鳴育ちの彼は2度目の人生を満喫していた。

とは言っても楽しんでるだけではない。

リンカーコアが無いと言われても原作と戦いへの憧れが捨てきれずに、体を鍛えていたりしている。

その訓練は日課になってしまっているが、原作と戦闘への憧れは未だに捨てきれていなかった。

しかし志岐の傍には主人公である高町なのははおらず、彼は神の言葉を疑ってしまっている。

「神は死んだ…なんつってな」

原作に否が応でも関わる事になる呪いとフラグの建ちやすい呪い。

志岐にとって後者はどうでもよかったが、前者は大きな問題だ。

何しろあんな事件に巻き込まれるのは自分の人生を大きく変える事になる。

此処は魔法少女リリカルなのはの世界だが、普通の人間としてこの世界で生きていくという選択肢も存在するのだから。

尚且つ戦う手段を持たない普通の人間として生まれてきてしまった志岐は今の状態で原作に関わる事は命に関わる危険があると言うの

は重々承知だった。

現在は志岐は学校の帰る途中だった。

だが途中で嫌に喉が乾いたので自動販売機でジュースを買っていたのだ。

そのまま歩いていると家の近所にある公園の傍を通る。

昔はこの公園で同年代の子供や兄と遊んだ物だった。

しかし精神的には18歳を超えていた志岐ははしゃぎ回る子供や必死に自分の相手をしようとする兄は、中々に微笑ましかった。

すると視界の端にある人物を捕らえる。

公園のブランコに寂しそうに座る、栗色の髪をツインテールにした可愛い少女……いやこの場合は幼女と言った方が良いか。

ともかく、幼女が顔を俯かせてブランコに座っていた。

志岐は一応サッカー部に入部していたので部活終わりで既に日は暮れている。

そんな時間にあんなに幼い子供が1人で座っているのは少し不安だった。

志岐には少し子供好きで面倒見の良い所があったので、それも相まって声をかけようとした。

だが彼女へと向かう足は突然止まる。

どこかで見た顔だと思った所で、立ち止まり、どんどん鮮明に思い出す。

そう、彼女の事を志岐は知っていた。

彼女こそが高町なのは。

この魔法少女リリカルなのはの主人公であり、莫大な魔法の才能をその身の内に秘める少女だ。

このまま彼女に関われば、原作に介入してしまう可能性がある。

リンカーコアが有り、魔法が使えるなら此処で主人公である彼女に接触するだろうが、志岐は悩んでいた。

（俺はこのまま原作に介入して良いのか？何の力も持たない俺が、彼女達の足手纏いになるんじゃない？）

原作に介入出来ずに憧れを捨てるのも嫌だが、自分が下手に関わる事で足手纏いや枷になるのではないかという懸念があった。

その場で2、3分ほど考えて結論を出した。

「帰ろう」

暫くは様子見で良いだろう、もし万が一にも自分に転機が訪れたらその時に関わろう。

そしてそんな機会が無ければ、憧れは捨てよう。

志岐はそう心に誓った。

落ち込んでいる風な幼女をその場に残してしまうのは、面倒見の良
い志岐の心に傷をつけたが、これから考えると、やはり接触は出
来ない。

「これで良いんだ」

だが志岐は、眠りにつく前にこの光景が浮かんでしまい、結局後悔
してしまった。

□ □ □ □ □

翌日。

再び学校へ通っていた志岐は帰り道にサッカーの動きを真似て小石
を蹴りながら帰っていた。

だが公園に差し掛かると、どうしても昨日のなのはの事が気になっ
て公園を覗き込んでしまう。

「……」

やはり今日も居た。

昨日と同じ様に顔を伏せながらブランコに座っている。

また、足を踏み出してしまふ。

前向きに考える事が出来る性格の筈なのに、どうしても後ろ向きな考えになってしまう。

それもそうだ。

彼女はこれから様々な出会いを通じて様々な辛い出来事に直面していく。

それを指を咥えてみているしか出来ない…そう考えると志岐はなのはに声をかける事を躊躇う。

なのはの家族もこんな気持ちだったのだろうか。

自分の家族が、下手をすれば命を失う危険を何もせず待つしかない。

歯痒く、悔しく、惨めだろう。

何故なら、志岐もそう感じているのだから。

「…くそっ」

昨日の後悔を思い出す。

あの時、ああしていれば良かった、こうしていれば良かったと後悔

する事は数多くある。

人間誰もが悩んで苦しんで後悔する。

でも時間は元には戻せない…足掻いてでも進むしかないのだ。

だがこれから自分の人生を変える出来事に巻き込まれ、何も出来ないというのも歯痒い。

志岐はその場に居るのが辛くなって走って帰った。

すぐ寝た。

やっぱり後悔した。

□
□
□
□
□

次の日も、やはりなのは其処に居た。

如何すればいいのか分からない。

もう此処からなのは眺めて10分以上経つ。

もし自分に力があれば、辛そうにしているのはに声をかけて助けてやれるかもしれないのに。

最低系と呼ばれても良い、救えるのならば救ってやりたい。

辛そうにしているのを見ると自分も辛くなってくる。

だがそれ以上に、何もせずに眺めている自分が惨めで汚く見える。

自分が傷つく事を恐れて年下の子を救う事を恐れてしまっている。

自分自身に反吐が出る。

救ってやりたいと思った。

そして偶然か、なのはがスツと顔を上げると、その瞳からは涙が流れていた。

一瞬だけ目が合った。

違ったのかもしれない。望んでいなかったのかもしれない。しかし志岐には瞳がこう訴えているように聞こえた。

『たすけて』

気がついたら足は自然と動いていた。

何が原作だ。

此処は一つの世界であってアニメじゃない。

彼女はキャラクターじゃない、1人の幼い少女なんだ。

後の事はその時に考えよう。

もう後悔もしたくないし、見捨てたくない。

一昨日の誓いをあつさりと覆してしまい、志岐は新たにそう心に誓う。

そして彼女の正面に立つと、手を差し出してこう言った。

「俺は七村志岐。お前の名前は？」

何処かで神様がニヤリと笑っているような気がした。

□ □ s i d e なのは □ □

お父さんが事故で入院した。

一時期はもう駄目かと思われるほど酷い怪我だったらしいの。

峠は越えたけれどお母さんはお店の事で忙しいし、お兄ちゃんも剣の修行に没頭、お姉ちゃんもお手伝いで忙しくなっちゃったの。

だから私はいいい子でいないといけない。

皆に心配をかけないようにしないといけない。

でも…

スツと目の前に手の平が差し伸べられる、俯いていた私は顔を上げるとその人を見た。

これから私が憧れて、目標となる人が、私が恋する男性ひとがそこに居た。

「俺は七村志岐。お前の名前は？」

黒くて短い髪は癖毛で少しだけ撥ねていて、優しい黒い瞳は私を見つめていた。

そして私は答えたの。

「高町…なのは…」

□ □ 歯車は揃った □ □

□ □ さあ、回そうか □ □ □

第1話 介入不能？介入可能？（後書き）

はい、まずはなのです。

これだけでオトしたつもりではありませんがこれから付き合っていく内に、気がついたら惚れたという事になっています。

しかしそこはキングクリームゾン！

序に時間軸もキングクリームゾン！

…キーワードにキングクリームゾンを加えたほうがいいような気がするな。

第2話 原作開始秒読み開始（前書き）

キンクリをしてしまった自分をお許し下さい。

というかご都合主義でお願いしますです。

考えようによっては魔法の言葉ですよ、キングクリムゾンって。

第2話 原作開始秒読み開始

「オラ！テメエ待てこら！」

「ぶっ殺すぞこの野郎！」

街の一角を1人の青年が走っている。

その後ろからは10人を超える、見るからにガラの悪そうな男子高校生が追いかけていた。

青年は見つけた路地に駆け込み、不良たちも皆それを見てその路地に突っ込んでいく。

「お疲れ」

その言葉と同時に、最初に路地に駆け込んだ不良の顔面に足が激突した。

「オブア！？」

走っていた勢いがついていた為か、その威力は見た目よりも高く、蹴られた男は顔を抑えて悶絶していた。

「真二！？」

「真ちゃん！」

どうやら倒れた男は真二という名前らしく、他の男達が近づいて心

配する。

だが他の数名はその蹴った犯人に目を向けた。

「この…いい加減にしゃがれ七村ア！」

そう、この不良達が追いかけていた青年は七村志岐。

あれから4年の歳月を経て現在16歳の高校1年生になっていた。

「いい加減って…何をいい加減にすりゃあ良いんだ？」

「俺等の商売の邪魔するんじゃないやねえよ！」

「…商売って…唯のかつ上げじゃん」

「うるせーよ！」

3人の不良が志岐に向かって殴りかかろうとするが、路地では体が引つかかって美味く動けずにいる。

「お、おいもつと離れろよ！」

「後ろ行け後ろ！」

「邪魔だつての！」

そうこうしている隙に、志岐は踏み込んで1人の顎を掌で打ち上げた。

一瞬首が妙な音を出して、その男は地面に伏した。

「横島！」

「この…！」

だが反撃に出る前に志岐の蹴りが腹に突き刺さりもう1人も腹を押さえて地面に倒れる。

「この狭い路地で一気に何人も来ようとするからだ…まあもつとも…」

後ろに控えていた不良達も志岐に襲い掛かろうと地面を蹴った。

「フツーにやつても負けないけどな」

□□□□□

学生鞆を肩に担いできた道を戻る。

その手には2つの財布が握られていた。

志岐が通う高校の校門で、そわそわしながら誰かを待つ男子生徒と女子生徒が居た。

「お待たせ」

持っていた財布をその2人に軽く投げつけると、慌てながらも何とかキャッチした。

この2人は恋人同士なのだが、放課後にデートに行く約束をしていた所を先ほどの不良にかつ上げされてしまったのだ。

デートに行くのならお金は持っているだろうと思われて。

そこへ偶々通りかかった志岐は背後から不良の1人に膝カックンを決めて挑発し、先ほどの展開に戻る。

「わ、悪いな七村…危ない事させて…」

「別に、あいつ等とじゃれるのも結構楽しいしさ…これからは気をつけるよ」

今度こそ帰宅するために自分の家がある方向に向かって足を進める。

先ほどの2人を助けたのは、別段志岐に正義感があるからという訳ではない。

4年前から今まで、結局志岐は何かしらの能力やらを手に入れる事は出来なかった。

原作への憧れはほぼ薄れてしまい、現在では様々な楽しみを見つけようとする生活を送るようになっていく。

原作に介入できないのならば、せめて普段の生活は楽しもうと。

「ふいふ、今日も楽しかったぜ」

両腕を空へ伸ばして背伸びする志岐の顔は満足気で清々しそうだった。

「序だしあそこに寄って行くか」

学校からの帰り道の途中にある店。

結構な甘い物好きである志岐にとってはその店の存在はありがたい物であり、そこにはある少女も居た。

暫く会わないと不機嫌になってしまうその少女からは兄のように慕われており、ついつい面倒を見てしまうのだ。

自分の財布を用意してその店のある道へと辿り着く。

喫茶翠屋。

それが志岐のお気に入りの店の名前だった。

店の入り口であるドアを開けるとベルが鳴って店員が此方に気がついていた。

「あら志岐君、いらっしやい」

「どもっす桃子さん」

栗色の髪に三児の母とは思えないくらい若々しい姿の女性。

翠屋のパティシエである高町桃子である。

そして…

「ただいまー！」

「「お邪魔します」」

後ろを振り返ると栗色の髪の毛をツインテールにし、白い制服に身を包んだ少女。

その後ろには白い肌に金髪で、先ほどの少女と同じ制服を着ている少女と、紫色の髪をし、服装はまた同じ制服を着た少女が居た。

「あ！志岐お兄ちゃん！」

「よう、なのはにアリサ、すずか」

彼女は高町なのは。

4年前に志岐が声をかけた少女であり、魔法少女リリカルなのはの主人公だ。

その後ろの2人はアリサ・バニングスと月村すずか。

彼女達は家が豪邸のお嬢様でありなのはの友人だ。

「七村さん」

「志岐さん、こんにちわ」

実は志岐は、この2人にも兄のように慕われていたりする。

まあともかく志岐は椅子に座るとコーヒートシュークリームを注文した。

なのはは志岐の隣に座り、アリサとすずかは向かいの席に座った。

「最近志岐お兄ちゃん、翠屋にも学校にも来てくれないから寂しかったの」

「おいおい、俺も暇じゃないんだし何時も行ける訳じゃねーし」

「むう、それでも寂しいものは寂しいの！」

やれやれと首を振りながらなのはの文句を受け流していく。

これくらい受け流せなければ今までやっては来れなかった。まあ志岐は妹の我侭のような物だとももってその殆どを無視していた。

「でも、七村先生が最近お昼ご飯が無いって落ち込んでましたよ？」

すずかがそう教えてくれる。

七村先生…フルネームは七村史戸^{ななむらしへ}。

今世での志岐の実兄であり、既に大学を卒業して教師の仕事に就いている。

志岐に負けず劣らずの子供好きで小学校の先生になってしまった程

だ。

なのは達の担任では無いのだが志岐繋がりでそれなりに仲は良さそうだ。

因みに七村家の両親は現在世界一周旅行に出かけているので不在。

その上兄である史戸は家事が一切出来ないので、料理、洗濯、掃除等その他もろもろも志岐が一手に引き受けている。

しかし史戸は毎回必ずと言っていいほど弁当を忘れるので昼休みになると志岐が届けに行く事がある。

因みに志岐の高校からなのは達の小学校までは徒歩で5分、走れば1分で到着が可能。

故に、志岐はよく小学校へと入る事がある。

しかも昼食を終えた後の昼休みは子供たちの面倒を見ているので軽く人気者だった。

「ま、なんにしても弁当を忘れる兄貴が悪いんだけどな」

「あはは…それを言われたら反論出来ませんね…」

志岐は天井を仰ぎ見る。

新学期は始まったばかりだが、なのはが小学3年生になったからには原作が始まるのはもうすぐだ。

その時、自分に何ができるかを考えながら、運ばれてきたコーヒートシュークリームを食すのだった。

第2話 原作開始秒読み開始（後書き）

因みに恭弥さんはシスコンではありません。

妹思いますが二次創作使用の重度なシスコンではありません。

あの人は良い兄貴ですよ、ホント。

次回から本格的に原作に介入して行きたいと思っています。

第3話 種（前書き）

原作スタートですが、まだ戦闘には入りません。

前置き程度です。

第3話 種

志岐の朝は早い。

両親が旅行に行っているので自分で家の事をしなければならない。

朝起きてから洗濯物を干して兄と自分の弁当と朝食を用意する。

その後、すぐに家を出て学校に向かうのだ。

なのは達はバスで学校に向かうのだが、志岐は体を鍛えるトレーニングの一環としてランニングしながら登校するのだ。

「おい兄貴！おきねーと遅刻するぞ！教師が遅刻するなんて恥ずかしいのか！？」

自室で眠りこけている兄に声が届くように声を出す。

すると部屋のドアが開いて兄はリビングにやって来た。

「い、ごめん志岐……」

少し長めの黒髪に黒目のパツとしない青年。

教師としての経験も短い志岐の実兄である史戸だ。

「いいからさっさと飯を食ってくれ…後弁当忘れるなよ」

志岐はパツとせずヘタレな兄の将来が心配になっていた。

家事は一切できず、恋愛事に初心で奥手な兄に将来良い嫁が見つかるのかと…。

食事を終えた史戸は準備を整えて荷物を持つ。

「じゃ、じゃあ行ってくる！」

ドアを開けて出て行く兄の後姿を見送るが、机の上に目線移すと毎度の事ながら弁当箱が置いてあった。

またか…そう思い2つの弁当を鞆に入れて家を出ることにした。

□
□
□
□
□

「ふう…」

学校で、志岐は珍しく溜息を吐いていた。

「んお？どうした志岐？溜息なんか吐いちまって」

そう志岐に話しかけてくるのは、志岐の友人である浅木美希。あさぎ みき

赤い髪を短く切っており、ボーイッシュな顔立ちで、男子より女子にモテるタイプ。

女の癖に男言葉で喋るのだが、気さくで取っ付き易い中学時代からの友人だ。

志岐は中学の後輩の兄貴分ならば美希は姉貴分であり、その仲の良さと夫婦のようなとっつき合いで、一部では付き合っているのではないかという噂までもが立っている。

「別に何でもない…ってか俺は今から兄貴に弁当届けに行かなくちやいけねーから」

昼休みなので周りはちらほら弁当やパンなどを取り出して食べている。

志岐は小学校まで行き、そこで弁当を食べてから小学生の相手をするのだ。

だがそれより、リンカーコアを持たない自分はユーノ・スクライアの念話が聞けないので正確に原作が始まる時期を知らないのだ。

それが最近志岐の悩みになっていた。

「ともかく俺は行ってくる…じゃあな」

「あ、おい…」

美希の声を余所に、昼休みが終わらない内に行って戻らなければならないのでとりあえず行く事にした。

弁当を持って学校を出るとそのまま小学校のある方向まで走り続ける。

1分もしない内に、なのは達が通う私立聖祥大附属小学校に到着する。

まずは職員室に向かう。

ガラスと戸を開けると、教師の方々から視線を集めるがすぐに笑顔になって迎えてくれた。

以前から弁当を届けに来る志岐の存在は、昼休みに子供をまとめ、仕切ってくれるという物であり、教師にとっては喧嘩や怪我もしないので嬉しい存在だった。

「兄貴、弁当」

史戸の机に行くと苦笑いしてその弁当を受け取った。

「悪いな…何時も何時も…」

「そう思っならもう2度と弁当を忘れないようにしてくれよ」

「あはは、善処するよ」

ハアと溜息を吐いて屋上へと向かう。

なのはに会いに行くのだ。

折角小学校に来たのに、会いもせずに帰るとなのはに怒られるのだ。

「あ、兄ちゃん！」

「志岐さん、こんにちわ」

「おう、今日も元気だなお前等」

途中で何度か懷かれている小学生とすれ違つと挨拶をしてくるので、軽く返しておく。

流石、この学校の兄貴分と言つた所か。

そして屋上に辿り着くと、ベンチに座つて食事をしているのはとアリサとすずかを見つけた。

3人で話し合つて、なにやらなのはは首を捻っている様子。

「よう、なのはが何か悩んでいるなんて珍しいな」

「あ、志岐お兄ちゃんなの！」

「何の話をしてたんだ？」

「将来の夢の事ですよ。なのはちゃんはまだあまり決まっていなくて…」

志岐の問いにはすずかが答える。

なのははにやははと言つて苦笑いしている。

「ふうん…けどお前らはまだ小学生なんだし、具体的に決まっていなくても別段問題ないだろ？」

「そうだけど…」

それでもうーんと唸っているのはを見て志岐は思いついた事を言
ってやる。

「なのは女の子なんだし、器量も悪くない…誰かの嫁さんになる
つても一つの将来だと思っぜ？」

「お嫁さん…？」

暫くは俺の言っていた意味を考えていたが、理解するとカアッと顔
が赤くなる。

「何照れてんのよ」

「はははっ！なんだなのは？もう好きな奴でも居るのか？」

アリスが突っ込み、志岐が笑っせいで益々なのは顔は朱色に染ま
っていく。

いや、顔を赤くするのは別の理由がありそうだ。

「で、でも私…その、志岐お兄ちゃんにはつり合わないの…」

「ん？何か言っただか？」

「う、ううん！なんでもないの！」

今のなのは声は笑っていた志岐には届いていなく、なのは胸を

ホツと撫で下ろす。

そんな事も知らず、志岐はこんな事を思っていた。

（原作にやあ無かったが、なのはも恋をする年頃か…兄貴分としては叶えてやりたいもんだ）

「って考えてるんでしょうね…」

「う、うん…多分そうだね…」

アリサとすずかは、原作はというのは置いておき、志岐の考えを見抜いていた様で、呆れた表情と苦笑いをしていた。

志岐も適当に座る場所を見つけて弁当を広げる。

「志岐お兄ちゃんは何か将来の夢とかあるの？」

なのはは、参考になればと思い聞いてみるが、志岐も目を閉じて考えていた。

「…俺は今まで色々やってきたからな…便利屋とかいいかもな。収入は微妙そうだけど」

「便利屋？」

「色々な仕事を引き受けるのさ…何でも屋って方が分かりやすいかな？」

「へえ…」

と、此処まで来て思い出す。

こんなシーンを何処かで見たような気がする…そう、前世で、アニメで。

ハッと思い出した…この会話は原作が始まった日の会話だった。

という事は既にユーノもジュエルシードも海鳴市に落ちて来ているはずだ。

此処で志岐は会話を变えてみる事にした。

「じゃあ、寝ている間に見る夢でどんな職業に就いていたか考えろよ。今日はどんな夢を見た？」

今日この日、なのははユーノがジュエルシードの暴走体と戦っている夢を見るはずだ。

上手く行けば確認を取れる。

「今日の夢…不思議な夢だったの…民族衣装みたいな服を着た女の子が、恐いお化けと戦ってたの」

一瞬、ユーノは男では？と思ったが、ユーノは見ようによっては女の子にも見えるかと無理矢理納得する。

「はあ？何よそれ？」

「うーん、でもそんな感じの夢だったの」

3人に悟られないように、志岐は溜息を吐いた。

間違いなく、今日は原作開始日だ。

今日の帰り道、フェレットになっているユーノ・スクライアを保護してなのは魔法の力を入れる。

自分はまだ何の力も持っていないのに…。

このまま足手纏いになるしかないのかと考えると、志岐は全身から脱力した。

「にゃ？志岐お兄ちゃんどうしたの？」

「具合でも悪いんですか？」

なのはとずくは心配してくれているが、返事をする気力も無かった。

「いや、そうじゃないが…俺今日はもう戻るわ」

食べかけの弁当箱をしまい、立ち上がってその場から去る。

「本当に大丈夫？もし体調が悪いなら家から車呼んで家まで送らせてますけど…」

アリスも心配してくれているが、志岐は首を横に振ってその場を後にした。

□□□□□

「はぁ…こりやあもう駄目かね…いや、なんとかすれば俺もなのはを手伝える筈だ…前向きに…楽しく考えるんだ俺」

自己暗示のように呟く志岐は、少しだけ元気を取り戻すと、空を見上げて歩いた。

しかし空で一瞬何かが光ったのを見る。

「ん？痛っ！？」

そしてその光った物体は志岐の額に落ちてくると、地面に落ちた。

青く輝く小さな石。

いやこの場合は種と言う方が正しい表現だろうか。

種には？という数字が刻まれていた。

「これってまさか…ジュエルシード？」

願いを正しく叶えるロストログア、ジュエルシードシリアル？。

それは今、彼の元に落ちてきたのだった。

第3話 種（後書き）

はい、ジュエルシードゲットです。

無理矢理原作に介入させられる呪いが働いています。

そしてオリキャラ入れました。

果たして唯のオリキャラなのか、それとも転生者なのか…ぶっちやけ決めてません（笑）。

第4話 兄妹（前書き）

とつとつ戦闘描写です。

上手く書けているか分かりませんがどうぞよろしくお願いします。

第4話 兄妹

キンコンカーンと授業終了の鐘が鳴る。

志岐はポケットの中にある青い種、ジュエルシードを握る。

もしこれにリンカーコアを願えば、自分にも魔法が使えるようになるのではないかと思っているのだ。

しかしどうするかは悩んでいた。

ジュエルシードは危険な物だし、なのはとユーノ、フェイトも集めるのでこれを持っていると原作に深く関わる事になる。

更に暴走すれば志岐の身も唯では済まないだろう。

「とりあえずは様子見か」

帰宅の準備を整えて教室から出る。

道端で、今頃ユーノは、念話でなのはに助けを求めている頃だろう
と思い、苦笑する。

「俺にも力があれば……ってヤバっ!?!」

不用意に願いを思うとジュエルシードが反応して暴走し、叶えかねない。

だがポケットのジュエルシードは何の異変も無かった。

ホッと息をつき、無駄な事は考えないようにするようにした。

ふと帰る途中に翠屋が見えたが、これからはが忙しくなると思うと、あまり関わらないようにしようと思い、その場を去った。

そして、何も出来ない自分が不甲斐なくなった。

七村家の家はマンションだ。

エレベーターで上層階まで行くと、鍵を取り出して自分の家を開け、自室に入る。

中には勉強机と椅子、クッション、本棚、ベッドと、あまり飾り気の無く、必要な物しか置いていない。

「ふう……」

椅子に座るとポケットに入れてあったジュエルシードを机の上に転がした。

コロツと転がると動きを止めて輝いた。

「こんな小さな物のせいで…フェイトは…」

フェイト・テストロッサ。

準主役級の役所で、無印の頃のなのはのライバル。

使い魔であるアルフと共に母であるプレシア・テストロッサの命令

でジュエルシードを集める。

プロジェクトFATEによってクローンとして生み出された。

前世から彼女の人気はリリカルなの中でも群を抜いており、志岐も無印を見た時には涙を流した物だ。

そんな風に原作を思い返してみると、ジュエルシードもかなり綺麗な石に見える。

まるで宝石のようだ。

「それ宙に浮かんでいる所なんて、まるで生きているみたいだったしな…」

フワフワと浮かんでいる時に、志岐はそう思ったのだ。

まるで生きているかの如く、意思を持つてるかのように浮かび上がり、飛び回っていた。

「…まあ、俺には関係ないか…飯の買出しにでも行くか」

全て自分には無関係…そう思う事で不甲斐ない自分を誤魔化した。

近くのスーパーに向かうために、部屋を出る志岐。

机の上では、ジュエルシードが綺麗な輝きを放っていた。

□□□□□

日も落ちた頃、志岐は夜の道を歩いていた。

食材を買ったが、醤油が足りない事に気がついて再び向かったがスーパーはもう閉まっており、近くのコンビニで買って済ませたのだ。

「最近のコンビニは何でも売ってて便利だな…味は落ちるけど」

そのまま歩いていると、空の向こう側に青い光が見えた。

「なんだあれ…飛行機か？」

しかし青い光は見た事が無い…するとその光はどんどん近づいてきた。

咄嗟に身構えるが、青い光は小さく、志岐の目の前で止まった。

それは紛れもなくジュエルシード、シリアル？だった。

「これは…」

淡く輝くジュエルシードは志岐の前で円を書くようにクルクルと回っていた。

「暴走…じゃあ無さそうだな…何がしたいんだ？」

ジュエルシードは、突然志岐に近づくと、額に触れた。

そしてそれは、淡い光を放った。

「んなつ!？」

原作にも無かった突然の事に志岐は戸惑うが、不思議と危険な感覚は無かった。

そして聞こえた。

《タスケテ》

「はあっ!？」

突如として頭に響いてきた声に戸惑い、不思議な感覚に陥る。

「も、もしかして…ジュエルシードなのか…？」

《ワタシタチノキョウダイヲ…タスケテ》

「兄弟!？それって…他のジュエルシードか!？」

《ソウ…シリアル???ガチカクデボウソウシテル…タスケテアゲテ》

???と言えはなのはが最初に封印するジュエルシード…そう志岐は思い出した。

「だが…助けようにも俺には…力なんて無いんだ」

《ダイジョウブ…ワタシガチカラヲカス》

その言葉を聞いて、志岐は敏感に反応した。

「力…俺に、貸してくれるのか？」

《キミガ、ソレヲネガウノナラ》

まさか、此処に来て力を手に入れる道が有るとは思わなかった。

しかも、それを叶えてくれるのがジュエルシードになるとは。

（どうする…原作に無い展開でこれからどう影響するか分からない…！だが此処でチャンスを逃す訳にはいかない…！）

「ともかく、ジュエルシードが暴走している場所に行こう。案内してくれ」

《コツチ》

ジュエルシードは宙を浮かんで志岐を先導する。

そのまま住宅街を走っていくと、その先で大きな音がする。

「今のはジュエルシードか…なのは」

幾ら力を手に入れる前とはいえ、妹のように可愛がっていたのが危険な目にあっていると思うと、少し心配になってしまう。

そして辿り着いた交差点。

そこでは黒いドロドロの物体が、白いバリアジャケットに身を包んだのはと対峙している所だった。

なのはの肩の上にはフェレット状態のユーノも居た。

「今だ！ジュエルシードを封印して…！」

「グウオオオオオオオオオオ！」

なのはが封印をする前に、ジュエルシードの暴走体は唸り声と共に再びなのはに襲い掛かった。

「きゃああああっ！？」

とつさに杖であるレイジングハート突き出して顔を背ける…これも原作には無かった展開だ。

レイジングハートはプロテクションを張るが、なのはが引け腰なので輝が入る。

そしてプロテクションを突き破り、ジュエルシードの暴走体はなのはへ体当たりする。

「危ない！」

「へっ？にゃああああああっ！」

ユーノの声で、何とかその場から離れて攻撃を免れたが、暴走体が壁に突っ込んだ衝撃で吹き飛ばされてしまった。

思わず飛び出してしまいそうになるのをグッと堪える。

今飛び出しても何も出来ない。

「ジュエルシード、俺に力を貸してくれるんだろ」

《ネガツテ、ドンナチカラガホシイノカラ》

「俺は…力が欲しい、体も頭も、全てを強くしてくれる…そんな力を俺にくれ！」

《…願いを受理、ジュエルシード・シリアル？、能力・強化》

ジュエルシードは強い輝きを放って機械的な声でそう言った。

志岐は意を決してそれを握り締める。

《ネガツテ、イメージシテ…ソウスレバキミノチカラハホンモノニナル》

イメージする。

自分が強く地面を蹴り、素早く奴の懷に潜り込む所を。

前世で隠れオタクだけあり、妄想やイメージは苦手ではなかった志岐は、素早くその感覚を掴んだ。

ストレングス
「強化か…」

全身が軽く、力を感じた。

そして暴走体がなのはに攻撃を仕掛けようとしている所に駆け込んだ。

「オオオッ！」

暴走体のドロドロとしている体を蹴り、吹き飛ばす。

原生生物を取り込んでいないから物理攻撃はあまり効果がないだろうが、これで良い。

「なのは、大丈夫か？」

「し…志岐お兄ちゃん…？」

吹き飛ばされた時の打ち所が悪かったのか、少し痛そうに顔を歪め、同時に驚いた顔をする。

ユーノの方を見るが、そっちは気絶している様だ。

「俺が抑える…その隙に封印するんだ」

「封印…うん！」

なのはを立ち上がらせて暴走体に向き直る。

「グ、グゴオオオオオオオオオ！」

「うるせええっ！」

飛び掛ってきた暴走体を正面から受け止めるが、ドロドロしていて触り心地は微妙だ。

その隙に志岐は横からフックを打ち込み吹き飛ばす。

「今だなのは！」

「うん！リリカルマジカル！ジュエルシードシリアル？？？！封印
！」

レイジングハートの先から桜色の帯が現れてジュエルシードに巻きつく。

するとジュエルシードは封じられ、暴走は収まった。

「…終わったの？」

「ああ、お疲れさん、なのは」

「…うん」

そう返事をする、なのはは気を失ってその場に倒れた。

緊張の糸が切れたのか、もしくは痛みに耐えられなくなったのか、ともかくこれで誤魔化しが効くだろう。

《ワタシノキョウダイヲ…》

「ああ」

宙に浮いているジュエルシードシリアル???を掴みポケットに入
れると、フレットであるユーノを肩に乗せ、なのはを背中に負ぶ
って高町家まで運ぶ事にした。

「…昔より大きくなったな、なのは」

夜は更けていき、ある世界では神様がほくそ笑んでいた。

第4話 兄妹（後書き）

ジュエルシードが意思を持っているのは、神様が手を加えて改造したからです。

そういうご都合主義でいきますのでよろしくお願いします。

今回はフェイトとアルフ、そしてオリキャラが出てきます。

それでは次回もよろしくお願い致します。

第5話 不確定要素（前書き）

今度はフェイト側です。

駆け足気味のストーリーですが、ご容赦下さい。

第5話 不確定要素

その後、志岐はなのはを家に送った。

兄である恭也と姉である美由紀、そして父である士郎、母の桃子に預けていった。

なのはが眠っている様子を見て、恭也に睨まれたが、倒れているなのはを保護したと言っておいた。

そして、事情があるのでなのはには自分が送ったと言わないで欲しいと伝えておいた。

恭也は納得のいかなさそうな顔で睨んでいたが、士郎と桃子は志岐の気持ちを汲んでくれて、何も聞かなかった。

恭也は別段志岐の事が嫌いなのではなく、大事な実の妹が心配なだけだ。

今度こそ家に帰ろうと帰り道を歩いていく。

《…マダ》

「何?」

シリアル?が呟くように言った。

「何がまだなんだ?」

《マダ、ボウソウシテルキョウダイがイル》

そう、今夜の暴走体はまだもう1体居たのだ。

志岐も落ち着いて心を澄ませると、何やら違和感があるような感覚に陥った。

「これは…結界か？」

《ダレカガキョウダイトタタカッテル…スコシアブナイカモ》

この時期、他にジュエルシード集めているのはフェイトくらいだろう。

だが今接触すれば、ジュエルシードを全て奪われる可能性も否定できない。

「イマ、キョウダイトタタカッテイルマドウシノマリヨクガ、ヨウマッテイク…」

しかもフェイトとアルフは予想以上に苦戦しているようだ…。

「…行くぞ」

志岐は意を決してフェイトの元へと向かう事にしたのだった。

現在地から走って10分もすると違和感に気がつく。

恐らく結界魔法で社団されているのだらうと、志岐は気がついた。

「…シリアル??? お前に願う」

スツとポケットに入れられていた筈のジュエルシード、シリアル???が浮かび上がる。

それは、何かを待っているようにも見えた。

「お前に、場所を飛び、空間を破る…空間を制御する力を、俺は望む！」

カッとジュエルシードが輝くと、淡い光を放った。

《願いを受理、ジュエルシード・シリアル???、能力・空間》

そして志岐はシリアル???を掴むと違和感のある空間に手をかざす。

「……………行ける」

パキーンと硝子が碎けたかのような音と共にその空間が割れ、奥には灰色の街並みが見えていた。

志岐は迷わずその中へと駆け込んだ。

そして空中を見上げると、そこには大きな鳥と、それと戦っている金髪の少女が2人とオレンジの髪で獣の耳の生えた女性。

「フェイトとアルフ…だがもう1人は…? アリシア? いや、だがアリシアが居てはジュエルシードを集める理由が無い…」

「フォトンランサー、ファイア」

そうこうしている内にフェイトがフォトンランサーを放って鳥に直撃して黒煙を上げた。

流石に決まったかと志岐も思った。

「やったねフェイト！」

フェイトの使い魔のアルフがフェイトに近づいて抱きついた。

「お疲れフェイト」

「うん、エリシア姉さん」

エリシア、しかも姉さんと呼ばれたのを見て志岐は首を捻る。

フェイトの姉であるのはアリシアであり、エリシアというキャラクターは存在しなかった。

という事は…とある仮説に辿り着く。

そして志岐は風に揺れる黒煙を見てそれに気がついた。

「ギイイイイイイイ！」

巨大な鳥は翼を広げてフェイトとアルフに向けて突進する。

志岐は先に気づいていたので、素早く行動した。

空間の力を使い、空間を瞬間移動すると、フェイトとアルフのすぐ横に現れる。

そして2人を引き寄せると、再び瞬間移動で建物の屋根の上に移動してそこに降り立った。

「え…あれ？」

「な、何が起きたんだい!？」

2人はその場で慌てているが、鳥は唯一人空に飛んでいるエリシアという少女に標的を移した。

志岐は瞬間移動で鳥の背中に移動すると、強化の力を使いその背中を殴りつけた。

強力な拳が叩き込まれて鳥は地面まで吹き飛んでいく。

その足場を失った志岐は重力に従い落ちていくが、鳥はダメージで動けず、追撃を与える。

強化された肉体の両足で、重力の力も加えて踏み潰す。

更に鳥の顔面を蹴り上げると、ダメージの限界が来たのかその場で倒れ伏した。

恐らく絶命はせずともそれに等しい傷を負っただろう。

ジュエルシードは動かなくなった原生生物を乗り捨てるかのように宙に浮かぶ。

「ジュエルシード封印！」

すかさずエリシアという少女がジュエルシードを封印する。

先に奪い取られては堪らないと思った志岐は瞬間移動テレポートでジュエルシードの傍に來るとすぐさまそれを掴み取って再び地面に下りる。

しかし素早く回り込んできたフェイトとアルフ、そして後ろからはエリシアに挟み込まれる。

「貴方は何者…？ジュエルシードを返しなさい」

後ろからの声には僅かながら怒氣が含まれている声が聞こえるが、志岐は笑っていた。

嗚呼、これでいよいよ自分も戦える。

何時もの喧嘩等のチャチな戦いではなく、力と技をぶつけ合う戦いが。

だが3対1は旗色が悪いと判断した志岐は、この場は逃げる事にする。

瞬間移動テレポートで瞬間的に包囲網を抜け出すと結界を破ってそのまま逃走する。

「フェイト！追っつわよ！」

「で、でも結界から抜けちゃったし…暗かったから顔も見えなかつ

たし……」

「くっ……もう少しでジュエルシードが回収できたのに……！」

よく似た2人の少女が、方や悔しがり、方や苦笑していたのは、^{レポート}瞬間移動を繰り返して逃げる志岐は知らぬ事だった。

□□□□□

そして家に戻った志岐はジュエルシードとエリシアの事を考えながら眠りについたのだった。

「あれ？志岐、ご飯は？」

「今日は無し」

「えっ！？」

史戸はその日の夕食にありつく事はできなかった。

□□□□□

朝、志岐は目を覚ますとガバツと起き上がって机の上を見る。

其処にはシリアル？、シリアル？？？、シリアル？が置いてある。

《オキタ？》

「おっ…」

念話のように話しかけてくるシリアル？。

「????と?は?」

先日手に入れた2つのジュエルシードについて尋ねる。

《マダハナセナイ…ソレカラ？ニモチカラヲネガエバコタエテクレ
ル》

そう、シリアル？と????にしたように願えば、叶えてくれるだろう。

「…それはまた後でにしておく…ともかく学校に行く準備をしよう。
お前も来てくれ」

《ワカッタ》

3つのジュエルシードは宙に浮かびながら志岐についていった。

何時ものように朝食と弁当を用意する。

「兄貴！そろそろ起きた方がいいぞ！」

そしてまた何時ものように兄である史戸に声をかけると、ゆっくりと部屋から出てきた。

「うう…昨日はお腹が減って上手く寝付けなかったんだ…勘弁してよ…」

「さっさと食って行ってくれ…」

「うん…ってあれ？その青い石何！？てか浮かんでない！？」

「っ！？おっと手が滑ったア！」

拙いと反射的に思った志岐は持っていた皿を投げつけると同時に浮かんでいたジュエルシードを掴んでポケットにねじ込んだ。

そして史戸の顔面に皿が叩きつけられた。

「ぐはっ！？」

皿の面を受けた史戸は視界をふさがれ、皿を取った時にはジュエルシードは何処にも無かっただろう。

但し、史戸の顔は赤くなっているが。

「アレ？あの石は？」

「何の事だ兄貴？寝ぼけているんじゃないか？顔を洗って来いよ」

「そ、そうかな…まあ今ので間違いなく目は覚めたけど」

そしてその後、史戸は何時も通り弁当を忘れて出発した。

志岐は呆れて2つの弁当を鞆の中に入れて家を出たのだった。

第5話 不確定要素（後書き）

ジュエルシールドは既に3つです。

1つは肉体を強化する力。

1つは空間を移動、突破する力。

そしてもう1つはどうか…お楽しみに。

第6話 魔法と種とVS犬（前書き）

今回はあのワンコと戦います。

なのはとも会いますがどうにか誤魔化します。

第6話 魔法と種とVS犬

家を出た志岐は走りながら学校を目指す最中、ジュエルシードの新たな力について考えていた。

現在、志岐が持っているジュエルシードは？と？？と？？だが、力があるのは2つだけだ。

能力はそれぞれ肉体の能力を上げる強化の力と、空間を飛び越えたり破ったりできる空間の力。

しかしどうも攻撃性に欠ける。

強化すれば格闘戦は問題無いだろうが、遠距離の敵には不利だ。

更に言うならばこれから先の敵は空中に浮かぶ敵も多い。

どうにかして空中戦を行えるようにしなければこれからの戦いがかなり不利になる。

瞬間移動テレポートを乱発すれば素早く移動できる上に宙にも飛べるかもしれないが、どうやらジュエルシードにも魔力の限界があり、そう多く発動するのは得策ではない。

空を飛べて攻撃も出来るという力が理想的だ。

学校に到着すると、靴を履き替えて教室に入る。

しかしクラス内ではある話題が飛び交っていた。

「おゝっす志岐、聞いたか昨日の話？」

席に座ると、志岐の机の上に座る女子生徒である美希。

「昨日の話？」

「おう、なんか昨日の夜に住宅街の方で電柱が倒れてたり地面が抉れてたりしてたらしいぜ。大事件だろ！」

昨日のなのはとジュエルシードの暴走体が戦っていた現場だろう。

シラを切ればばれる事もないだろうし、妙になのはに情報が流れても面倒なので適当に相槌を打つ。

それより、何時もよりテンションの上がり具合が違うのを見て志岐は不思議に思う。

「どうしたお前…こういう話って好きだったっけ？」

「ああ、将来は記者とかになりてーと思ってるからこういう事件は大好物なのさっ！」

初耳だった。

確かにこういった事件のような物があつた時はニコニコして走り回っていたのを思い出す。

「んで志岐、お前なにか知らないか？」

「知るか」

万が一ボロが出ると美希に感づかれる可能性も否定できない。

さつさと話を切って1時間目の授業の準備をする。

そんな様子の志岐を見て、美希は面白く無さそうに唇を尖らせた。

「チエ、つまんねーの」

諦めたのか、美希は他のクラスメイトの所に行き情報を集めていた。

一方の志岐は溜息を吐きながら今後の事を考えていた。

□
□
□
□
□

授業の終了を告げるチャイムが学校内に響き、皆帰る支度をする。

志岐も急いで帰る準備を整えて帰る事にする。

今日はなのはが犬を取り込んだジュエルシードの暴走体と戦う筈だ。

そこで4つ目のジュエルシードを回収しなければならないからだ。

しかし志岐にはジュエルシードを封印する手段が無い…そこはなのはやフェイトに封印して貰った所を奪う形になるが、自分の力を集

めると同時に、ジュエルシードの兄弟を助けなければならない。

そして帰ろうと学校を出たとき、後ろから美希が追いかけてきた。

「おい志岐！今日は暇だろ？」

「勝手に決めるな。暇じゃないっての」

「いいだろ、偶には付き合えって」

肩に腕を回して絡み付いてくる美希だが、志岐はどうしても外せない用事だ。

「悪いけどどうしても無理だ…じゃあな」

素早く腕を外してその場から走り去る。

「あつ！待て畜生！俺の情報収集手伝えー！」

それが目的だったのだろうか、美希の足では志岐には追いつけず、
どんどん引き離されていく。

そして志岐が曲がり角を曲がり、美希もその後が続くが、そこには
既に志岐の姿は無かった。

「くっそー！志岐の奴、明日会ったら覚えてろよー！」

叫んだ声は、志岐の耳にも届き、苦笑を浮かばせるのだった。

志岐は瞬間移動がどの距離まで使えるかを確認するため、能力を現

時点で最大限引き出してその場から家の方角へ移動したのだ。

しかし思ったほど移動は出来ていなく、さっきの場所から20メートルも移動できていない。

テレポート
瞬間移動は短距離の瞬時移動に適している力のようだ。

人目につかない路地に入ると、志岐はシリアル？のジュエルシードを出して問いかける。

「なあ、シリアル？」

《ナニ？》

「空間を長距離移動するのはどうすれば出来る？」

すぐにジュエルシードのある場所まで行けば、その後の対応もし易い。

なので長距離移動の手段は必要な物だった。

《イメージスル…クウカンガアツシユクサレテ、ソコニスイコマレルノヲ》

目を閉じて、志岐はイメージする。

正確には分からないので自分のイメージが大幅に絞めているが、自分の家の部屋に自分の体が吸い込まれるのを。

ズオツと何かを感じ、目を開けた瞬間には、既に自分の部屋に突っ

立っていた。

これなら場所がイメージできていれば何処にでも行けそうだな。

《コレヲツカエバ、ホカノセカイニモイケル》

「成る程…^{ワープ}亜空間移動ってところか」

正確には転移魔法の一種なのだろうが、志岐はこの技をそう名づけた。

そして、この^{ワープ}亜空間移動は多量の魔力を使う様で、そう何度も使えるわけでもなさそうだな。

《…キタ、ボウソウヲハジメタ》

家でジュエルシードの力について分析していると、シリアル？がそう告げる。

志岐は自分の正体がばれないように史戸が使っていた黒いロングコートを羽織り、フードを被る。

これならフードが取れない限り、誰も志岐とは分からないだろう。

「場所は分かるか？」

《ココカラソウトウクナイ…ココダヨ》

志岐の頭の中に位置情報が送られてくる…その場所は神社だった。

身支度を整えると、空間の力を使い、神社をイメージする。

「^{ワープ}亜空間移動！」

瞬間長距離移動をし、神社に辿り着く。

しかし正確な座標をあわせる事が出来なかったようで、空中に放り出される。

「くっ…強化！」
ストレンジス

慌てて体を強化して着地すると、神社の傍にある路地に着地した。

走って路地から出て神社に駆け込むと、そこには倒れている1人の女性と、ジュエルシードに取り込まれた黒い犬が居た。

「グルルル…ガアウ！」

犬は志岐を睨みつけると、その場で威嚇するように吼えた。

しかしそれに怯まず、志岐は強化された体で走ると、犬も真っ向から向かってくる。

「動物を痛めつけるのは好きじゃねーが…仕方ないよな」

昨日、鳥と戦った時も止めまでは刺さなかった志岐は、動物が結構好きなのだ。

今とて出来れば殴りたくは無いだろっが、残念ながらジュエルシードの方が優先順位が上だ。

「はっ！」

「ギャウツ！？」

足で犬の顎を蹴り上げると、犬は口を閉じて空中に浮かぶ。

そして浮かんでいる隙に尻尾を掴んで、そのまま地面に叩き付けた。

「ギユウウウウウ！？」

苦しそうな声に、若干の罪悪感を感じながら追撃の拳を握るが、犬は牙をむき出しにして牽制した。

「グアアウ！ガウツ！」

その場からバックステップで距離を取ると、石段の前に着地する。

なのはが来るまで決着をつけれない…そう思っていると下から足音がする。

振り返りたいが目の前の犬から目を離すわけにもいかず、その場で犬の様子を見続ける。

そしてなのははフェレットを連れて石段を登りきった。

まず最初に目に映ったのは黒い犬の暴走体だろう。

「原生生物を取り込んでる！？」

「如何いう事なの？」

「実体がある分、手強くなってる…」

そして志岐に目を移したが、フードを被っているので誰だか分からないだろう。

「あつ、危ないですから下がった方が…！」

心遣いは素直に嬉しいと思っただが、現時点なら普段から喧嘩をし慣れている自分の方が強いだろうと志岐は思った。

「心配には及ばん…コレがある」

少々声色を変えて言葉を発し、口調も変えてみる。

似ているかもしれないが、同一人物とは分からないだろう。

空中を指差すと、先ほどポケットから出した3つのジュエルシールドが浮かんでいた。

「なっ！？如何してジュエルシールドを…！」

ユーノが驚いている。

と言うか今はフェレットモードだから普通驚くのは志岐の方なのだが。

「あゝ！あれって昨日のジュエルシールドなの…！」という事は、志岐お兄ちゃん？」

志岐の傍で浮かんでいるシリアル???を見てそう叫ぶのはだが、
言い訳は用意してある。

「悪いが違つゝ昨夜お前が倒れている場所から奪っただけだ。そんな男は何処にもいなかったぞ」

「えっ?でも…」

この様子なら高町家は志岐の事をなのはに話してはいない様だ。

「なのは、僕も気絶して確認できなかったけどやっぱりそれは夢だったんじゃないかな?唯の人に暴走体を抑える力は無いから…」

「う、うん…」

2人でなにやら話しているが、その隙を狙ってか犬がなのはとユーノ目掛けて飛び出した。

「ガァ!」

「きゃあ!?!」

未だにレイジングハートを起動していなかったなのははプロテクションを張る事も出来ず、悲鳴を上げた。

しかし志岐が妹分に手を出させる筈も無く、犬を横から殴りつけてそれを抑えた。

「おい!俺が奴を抑えるからその隙に封印しろ!」

「は、はいっ！」

なのははユーノと話してどうにかレイジングハートを起動させる。

犬は体勢を整えると、再び志岐に目掛けて牙を向き、走り出した。

どうやら志岐を倒さねなのはを倒せないと判断したのだろう。

だが志岐は犬が志岐に飛び掛つてくると同時に瞬間移動で背後に回りこみ、回し蹴りで再び犬を吹き飛ばす。

「今だ！」

『シーリングモード』

「リリカルマジカル！ジュエルシードシリアル？？！封印！」

レイジングハートがシーリングモードになり、桃色の帯で犬を封じる。

そしてジュエルシードが浮かび上がり、その場には子犬だけが残った。

体は強化されていたのだろうが、志岐から受けたダメージで動けないようだ。

志岐は子犬をそっと抱き上げると、気絶している飼い主の横に優しく寝かせた。

だがすぐさま標的を封印されたジュエルシードに写す。

「しまった！なのは、早くジュエルシードを！」

「え？ああっ！？」

もう遅い。

なのはが気がついた時には、志岐は強化された脚力で走り出し、ジュエルシードを掴んだ。

「待つて下さい！それは本当に危険な物なんです！」

ユーノがそう言ってくると、志岐はなのはとユーノに向き直った。

「俺には兄弟を助けたがる意思を持つ石にしか見えないけどな……」

「「えっ？」」

志岐がそう言うと2人は素っ頓狂な声を出す。

今のうちに自分の部屋をイメージし、^{ワーフ}亜空間移動の準備を進める。

「如何いう事ですか？」

なのはは不思議そうな顔でそう聞いてくるが、志岐は既にイメージを終えた。

「悪いがそれはまた今度だ」

そついい残すと亜空間^{ワープ}移動でその場から去ったのだった。

第7話 力と、覚悟（前書き）

今回は色々とぶちまけます。

厨二とか思われる方が居るかもしれません。

それでも構わないと思う方はどうぞお願いします。

第7話 力と、覚悟

あの後、シリアル？とシリアル？の2つのジュエルシードにそれぞれ力を願った。

志岐を囲んで4つのジュエルシードが時計回りに飛び回る。

辺りは土が抉れ、木が切り刻まれ、地面には幾つもの剣や刀、槍が突き刺さっていた。

今志岐が居るのは海鳴市の外れにある山の一角だった。

此処でジュエルシードの能力の確認と特訓を行っていた。

ジュエルシードたちは、使えば使うほどその能力が成長していくらしい。

「少しやり過ぎた感が否めないな」

そう呟いてポケットから更なるジュエルシードを取り出す。

なのはが封印した物を奪い取った物で、その数は2。

アニメでは描かれていなかったが、問題なくジュエルシードを回収していた。

なのははまだ戦い^{テレポート}なれていないし、ユーノは補助と防御が主体なので、封印してから瞬間移動でジュエルシードを確保し、そのまま逃げるが必勝パターンになっている。

しかし1回は行動が読まれてしまい、残念ながらのはに回収されてしまった。

「まだ俺が弱いからだ…こんなんじゃ、まだまだ弱い」

地面に突き刺さっている刀を手に取り、木に向かって斬り付ける。

木が僅かに斬れるが、それだけだった。

その後も志岐は独学で剣を覚え、今日の特訓を終えるのだった。

「無理は禁物か」

ワープ
亜空間移動でその場から海鳴市の廃ビルの屋上に姿を現す。

テレポート ワープ
瞬間移動や亜空間移動を習得してから、高い所から街を見下ろすのが最近の日課になっていた。

アニメとかが良くやっているので、試しにやってみると中々気持ちよかったのだ。

《来る…》

後、唯一会話が出来るシリアル？の言葉が片言だったので、教えて練習をさせる事で上手く喋れるようになってきた。

「何が来るんだ？」

《暴走体》

「はっ？」

次の瞬間、街中がカツと輝くと、そこを中心に巨大な樹が生えた。

「何イ！？」

原作で見知ってはいたが、実際に見ると大分ショッキングな光景だ。
志岐が居た廃ビルも地震のような振動が走る。

恐らく樹から地面に生えた根っこが廃ビルの支柱を破壊してしまっ
たのかもしれない。

耐久度の低くかった廃ビルは崩れかける。

「くっ…！？」

しかし倒れはしなかった。

何故なら地面から伸びた根が廃ビルに絡みつき、なんとか支えたの
だ。

「しまった…特訓のし過ぎで今日の事を忘れてたな…急ぐか」

瞬間移動テレポートで元の樹に続く根っこの上に移動すると強化ストレングスで肉体を強化
して走り出す。

しかしその行く手を阻もうと蔓や根っこが鞭の様に振るわれる。

こんなに露骨に襲ってくる事は無かったので、それに驚いてしまうが、すぐに切り替える。

ヴォート
「真空」

空気が歪んで鞭と化した根っこと蔓にぶつかると、当たった根っこや蔓が輪切りにされる。

シリアル？の力は風。

風を巻き起こしたり気圧の変化等が可能になる。

今のは真空刃を発射して対象物を斬ったのだ。

フライ
「飛行」

今度は上昇気流を起こし、更に風を体中に纏わせる事で空中に飛び上がる。

襲い掛かってくる根っこを気流と風を操作しながら回避していくと、巨大な樹に近づいていく。

ヴォート
「真空！」

真空による攻撃を放つが、樹が巨大すぎて効果が見られない。

やはり威力が足りない様だ。

「なのはのディバインバスター並みに火力が無ければ駄目か…！」

だが飛行を解除して瞬間移動で近くのビルの上に着地する。

「あ」

「あつ！」

「ふえっ？」

此処でまたもやなのはと遭遇。

レイジングハートとバリアジャケットを展開したなのはとフェレットのユーノが居た。

フードはしていたので顔を見られる事は無かった。

「よう、また会ったな」

「また貴方ですか！もう邪魔しないで下さい！」

ユーノが若干ヒステリックな声で言われるが、志岐は軽く流す。

「そんな事より、アレを何とかしないでいいのか？」

指を指すと根っこが振るわれて街を破壊する。

このままでは街中が滅茶苦茶になってしまうだろう。

志岐となのはに目掛けても蔓が振るわれるが、志岐は空間の力を使う。

ルームフィクス
「空間固定」

今度の力は、名のとおり空間を固定して攻撃を防いだりする技。
前方の空間を固定して蔓を弾き飛ばす。

「おい、俺が奴等の攻撃を止めるから、隙を突いて封印だ。その後は早い者勝ちだ」

「で、でも…」

2人が反論をしようとする前に、樹の蔓が振るわれる。

ヴォート
「真空」

だが志岐は素早く真空の刃でそれを切り落とすと、飛行^{フライング}で空中に飛んだ、

四方八方から気の根っこが志岐を取り囲むように振るわれる。

タイフーン
「台風！」

志岐は自分の周りを包み込むように風を回転させて根っこを切り刻んで吹き飛ばす。

ジュエルシールドの内臓魔力を大きく消費する技だが、小規模の台風を生み出して周りの物を吹き飛ばす事が出来る攻防一体の技だ。

風が晴れると、木々は全て吹き飛ばされていた。

「今だ」

「はいっ！」

なのははレイジングハートを構えると、先端に桃色の光が収束されていく。

しかし、なのはの後ろ側から蔓が伸びて、ユーノに巻きついて攫っていく。

「きゃあああああああ！？」

「ユーノちゃん！？」

妙に女っぽい悲鳴となのはの呼び方に違和感を感じたが、志岐はとりあえず助ける事にする。

「メタルクリエイト
金属生成」

新たなるジュエルシードの力。

それは魔力から金属を生成し、形を与える、云わば練成のような力だった。

ジュエルシードシリアル??は金属関係の力を与えられていた。

ジュエルシードが発光すると、もう1つ光が生まれ、それがどんな形を成していった。

刃は繋がっておらず、ワイヤーの様な物で連結されており、妙にグ

ラグラとした剣が生み出された。

「蛇腹剣」

一般に鞭と剣の性質が合致したとされる武器である蛇腹剣を形成した。

志岐はそれを振るうと、ユーノを縛っている蔓を斬り、空中に放り出されたユーノを手で受け止めた。

「あ、ありがとうございます…」

「気にするな。それよりも早く封印を」

「あつ、なのは！早く封印を！」

「う、うん！分かったなの！」

思い出したかのようになのはそのまま封印を行った。

封印が完了すると、樹を消す事には成功したが街の傷跡は生々しく残っていた。

志岐はジュエルシードの回収をするために瞬間移動テレポートをしてジュエルシードを掴む。

なのはの方を見ると、此方では無く街を見ているようだった。

「どうした？」

志岐はなのはの隣に降りると、声をかける。

「私のせいだ…」

ぼそりと呟かれる言葉に、志岐は思い出す。

今回のジュエルシード暴走の件は、なのはが本格的に事件に関わる決心をする日なのだ。

「なのはのせいじゃないよ…僕のせいでもある」

ユーノが慰めようとするが、なのはは首を横に振った。

「うっん。私、今回の事で魔法の恐さを改めて知った」

その言葉に、志岐はハッとする。

魔法の恐さ。

魔法はその気になれば多くの人を傷つける。

特に志岐の扱うジュエルシードの力は、非殺傷設定などという器用な事は出来ない。

全ての攻撃が相手を傷つける。

「今までは、ユーノちゃんのお手伝いつて気持ちでこの魔法を使ってきたけど、これからは自分でこの町を守るために使いつて決めたの」

（こんな少女に、力の恐さを教えられるとは…）

そう思いながら、志岐は今までの自分を反省した。

「ありがとな、なのは」

「えっ…？」

聞こえるか聞こえないかの声で小さく呟くと、亜空間移動でその場から去ったのだった。

□ □ s i d e なのは □ □

「ありがとな、なのは」

「えっ…？」

ジュエルシードの封印を終えて、街の傷跡を見て今までの事を反省していると、私とは別にジュエルシードを集めている人が何かを呟いていたの。

何を言っているかは聞こえなかったけど、今の声は知っていた気がするの。

「どうしたのなの？」

あの日の夜、私を助けてくれたのは志岐お兄ちゃんだったと信じている。

さっきのロングコートを着ている人は、度々私たちとジュエルシードを取り合っているけど、あの人は私を助けてくれる。

だけど、何故ジュエルシードを集めているのかは分からない。

でも無理に聞こうとは思わない。

あの人は、必要な時がくればちゃんとお話してくれるの。

だから、その時まで待つてゐるね。

「…志岐お兄ちゃん」

第7話 力と、覚悟（後書き）

今回は志岐が自分の力の危険さを改めて自覚しました。

新たに手に入れた2つのジュエルシードの力も考えております。

次回はフェイトと謎の少女エリシアが登場しますのでよろしく願います。

第8話 三つ巴の戦い（前書き）

今回は原作で言うフェイトとの初会合です。

しかしそこへ志岐が入り込んで乱戦になります。

と言うか志岐の能力がこの時点でチートなんですけど…。

第8話 三つ巴の戦い

本日、志岐は再び山で戦闘の訓練を行っていた。

メタルクリエイト
「金属生成」

今度は鉄で出来た剣を生み出す。

周りが開けているので柄を持って適当に振り回す。

この訓練で分かった事が、刃物は押し付けたり叩きつけるだけでは斬れず、当ててから引くという動作が行われて初めて斬れるのだ。

生えている木に剣を当てて勢い良く引く。

ストレッチス
強化を体にかけているので、その威力は凄まじく、木が既に半分以上斬られていた。

しかし逆に、剣の方は強度が足りなかった様で刃毀れしてしまった。

「鉄じゃ強度に難ありか…まあデバイスと打ち合える期待なんてしてなかったけど…」

更に強力な金属を生み出すにはまだ錬度が足りないだろう。

「今はこれで何とかするしかないか…新しい3つの力も良好だし、今日は此处までにしよう」

すると、志岐のズボンのポケットに入っていた携帯電話が振動して

音楽が鳴る。

携帯を開くと、画面には月村すずかと表示されていた。

「どうしたすずか？」

通話ボタンを押すと、何の用かを問う。

「あ、志岐さん、なのはちゃんとアリサちゃんと恭也さんを誘ってお茶会をするんですけど、一緒にどうですか？」

すずかの家でのお茶会という事で思い出す。

今日はなのはとフェイトの会合の日であると言っ事を。

戦いはフェイトの勝利に終わるが、あのエリシアという少女がどう関わるかが分からない。

しかしジュエルシードがそこにあるのならは赴かなければならなかった。

「ああ、邪魔させて貰うよ。後でそっちに向かう」

そう言って携帯を切ると、亜空間移動で自分の部屋に移動する。

既に家へのイメージならば手馴れた物で、瞬時に部屋へと移動することが可能となった。

手早く汗をかいた体をシャワーを浴びて流し、荷物を纏める。

荷物と言っても行動を起こした後に正体を隠す為のロングコートを入れた鞆だけだ。

その後家を出るとそのまますずかの家がある方向に向かってランニングをする。

暫く走り続けると、目の前に大きな門が見えてきた。

すずかの家は猫を多く飼う超大きなお屋敷なのだ。

門に近寄ると、インターホンを押して暫く待っていると、反応があった。

「どなたですか？」

「七村志岐です。すずかさんに呼ばれてお邪魔する事にしました」

「聞き及んでおります。どうぞ中へ」

大きな門が自動で開かれると志岐は中へ入って向こう側に見える屋敷を目指す。

中へと入るともう猫が寄ってくる。

「よう、お前等の相手はまた今度な」

猫の頭を軽く撫でてやると再び屋敷を目指して歩くと、なのはとアリサとすずかがテーブルを囲んでお茶を飲んでいた。

3人が此方に気づくが、なのはがギョツとした顔になる。

「し、志岐お兄ちゃん!？」

「え？志岐さん？」

どうやらなのはとアリサは志岐が来ると言う事を聞いていなかったようだ。

「何だすずか、2人に言っ てなかったのか？」

「はい、特になのはちゃんにはサプライズになると思って」

可愛らしく舌を出しながらそう言っ と、なのはの顔が紅潮していく。

「す、すずかちゃん！」

「はいはい、本人以外にはバレバレなんだから隠す必要もないですよ」

反論しようとするなのはをアリサが嗜める。

なんだか妙な空気になっ てしまい、志岐は誘いに乗らなかつ た方が良かつ たかと思つ た。

『暴走体が、来るよ』

志岐にのみリンクした念話でシリアル？から連絡が入る。

それになのはとユーノは僅かに反応を示した。

暫く戸惑った表情をしていたが、ユーノが突然猫から逃げ出すように走り去ってしまう。

「ユーノちゃん！」

なのはの声を無視して茂みの方へと走っていく。

「私、ちょっと探してくるね」

席を立ててユーノを追おうとするなのはに、すずかが声をかける。

「一緒に行こうか？」

「ううん、大丈夫だよ。それじゃあちよつと行ってくるね」

そしてなのははユーノが向かった方へと走っていった。

志岐は暫く其方の方を見つめていると、アリサがニヤついていた。

「如何したアリサ？」

「志岐さん、なのはの事が気になるんじゃないですか？」

確かに、ジュエルシードの事で気になってはいたが、アリサのニヤついている意味が志岐には分からなかった。

「一緒に行つてあげたら如何ですか？」

すずかにもそう勧められたので、頷いて荷物を持ってその場を後にした。

屋敷から少し離れて誰にも見られていない事を確認すると、荷物の中からロングコートを羽織りフードを被った。

その後、飛行により空に飛び上がったのは達を探した。

そして再び空間に違和感を感じると、空間の力だ結界の一部を破つて中へ入る。

結界内に入ると、そこには巨大な猫が居て、一瞬だけ志岐も呆気に取られた。

「…となのはとフェイトは…？」

なのはは巨大な猫を封印しようと動いているが、そこへフェイトがやって来るとフォトンランサーを放って猫に当てた。

するとなのはは猫を庇うように飛んでプロテクションを展開するが、フェイトはフォトンランサーを猫の足元に当てて転倒させた。

志岐は、この戦いに手を出す気は無かった。

なのはの戦闘経験を積ませる為と、余計な事をしてジュエルシールドを逃したくなかったからだ。

「だから、見逃してくれねーかな？」

「…貴方は何者？」

志岐の背後からデバイスを突きつける金髪の髪をツインテールにし

た少女。

姿はフェイトに似ているが、デバイスの色が白いので違っだろう。

恐らく以前であつた際のエリシアという少女だ。

「アンタの予想通りだ…そうたる転生者さん」

「やっぱりアンタも転生者ね…」

そう、志岐が彼女、エリシアに立てた仮説とは、彼女も志岐と同じ転生者であると言う事。

「アンタ、ジュエルシードを集めて如何する気？」

「別に…俺はリンカーコアが無いからな。戦う力が欲しかったただだ」

その言葉にエリシアの眉がピクリと動く。

「ジュエルシードの危険さはアニメを見てれば分かってるわよね？」

「お前には分からないさ、転生したつてのに介入できる力を持たない奴の事なんてな」

そう言うと共に、志岐はエリシアの足元から風を発生させる。

渦を巻いて巨大化するその風はどんどんエリシアを飲み込んでいく。

「きゃっ！？これは…！」

トルネード
「竜巻」

規模は小さいが、エリシアの様な少女を包み込む大きさはあり、白い風に包まれてエリシアの姿は見えなくなってしまった。

今のうちに志岐はジュエルシードの確保を急ぐ事に。

「エリシア姉さん！」

「エリシア！このっ！」

フェイトとアルフは此方に気づき、フェイトは一直線にエリシアに向かい、アルフは志岐に牙を向ける。

ストレンクス
強化で体を強化すると、アルフの強力な牙を受け止める。

「急いで封印しろ！」

「あ、はいっ！」

志岐の声で封印を始めるのはを見て、フェイトとアルフは焦った。

「くっ…しまった…！」

「畜生！そこを退きな！」

2人が手こずっている間に、なのははジュエルシードの封印を終えた。

ここぞとばかりに、志岐はアルフの攻撃の僅かな隙を縫って瞬間移動^{テレポ}でジュエルシードの傍まで移動する。

掴もうとするが、腕に緑色の鎖のような物が絡み付く。

「チィ…ユーノのチェインバインドか」

その際になのはがジュエルシードを確保しようとするが、今度はフエイトのフォトンランサーが放たれる。

「きゃあああああっ！」

「なのはっ！」

それは戦闘経験が浅いなのはには回避できず、直撃を貰ってしまう。気を取られたユーノのチェインバインド^{ストレンクス}を強化で引き千切ると、ジュエルシードを確保した。

それと同時にフエイトは再び志岐に向けてフォトンランサーを放つが、志岐は落ち着いて瞬間移動^{テレポ}で傍の木の枝の上に移動した。

漸く竜巻^{トルネード}を破って中からエリシアが出てくる。

なのはとユーノ、フエイトとエリシアとアルフが志岐を見つけて近寄ってくる。

「ジュエルシードシリアル？…水滴^{ドロップ}」

新しいジュエルシード、シリアル？の力は水。

志岐は小さな、人の顔を1つ包み込めそうな水玉を生み出すとそれをそれぞれの顔にぶつけた。

「がぼっ！？」

「ぐっ！？」

水で顔を覆われたのはたちは慌てて水を外そうとする。

だが液体の水を外す事は敵わずどんどん冷静さを失っていく。

酸素が吸えずに苦しそうにした所で水滴ドロップを解除すると、水玉は弾けて空中に消えた。

「けほっ！けほけほっ…！」

皆が咳き込んでいる中、志岐はこの間に瞬間移動テレポートでその場を離れて身を隠した。

ロングコートを脱いで鞆の中へしまうと急いでその場を後にした。

□ □ side エリシア □ □

もうっ！とんだ邪魔が入ったわ！

私はエリシア・テストロッサ。

色々事情があつて現在リリカルなのは世界に転生してジュエルシードを集めに海鳴市に来ている。

今日は記念すべきなのはとの初会合。

すずかの家で巨大子猫のジュエルシードを取り合う予定だったのに、もう1人のジュエルシードを使う転生者に邪魔されて確保できなかったわ。

男みたいだったし、リリなのの世界に来るって事はきっとハーレム目的の輩ね。

フェイトは渡さないし、そんな最低系オリ主は私が成敗してあげるんだから！

ともかく、今日は撤退して家に居るけどこれからどうするか考えないとね。

「フェイトー！作戦会議始めるわよー！」

「あ、うん姉さん」

絶対に、私の可愛い妹2人は守ってみせるんだから！

勿論、お母さんだってね！

第8話 三つ巴の戦い（後書き）

と言う事で、またもジュエルシードは志岐の手に。

そしてエリシアは転生者で…名前から分かりますが彼女の姉妹です。

色々と原作内容が変えられているので原作崩壊は必須です。

それでは次回に続きますとも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6337x/>

魔法少女リリカルなのは -願種-

2011年10月29日20時14分発行